

## 教育課程部会特別活動ワーキンググループ（第2回）議事録

1. 日 時 平成27年12月22日（火）14時00分～16時00分
2. 場 所 文部科学省3F 2特別会議室
3. 議 題 (1) 特別活動の改善充実について  
(2) その他

### 【貝ノ瀬主査】

定刻となりましたので、ただいまから中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会特別活動ワーキンググループの第2回を開催いたします。

本日は白松委員，宮下委員が御欠席です。また，平川委員が3時前にお帰りになります。杉田委員は3時頃に遅れていらっしゃるということです。

前回，御欠席でございました恒吉委員，藤田委員，脇田委員が出席されておりますので，まず，一言ずつ御挨拶を頂戴したいと思います。恒吉委員からお願いします。

### 【恒吉委員】

東京大学の方で教えております恒吉と申します。教育の国際比較や社会学をやっております。もともと日本式の教育モデルみたいなものの国際比較をやっています。その中核が特別活動ということで国際発信などをしていたもので、ここに呼ばれているのかなと思います。いろいろ分からないことが多いですけども、よろしく申し上げます。

### 【藤田委員】

筑波大学の藤田でございます。よろしくお願いたします。特別活動は、今、恒吉委員がおっしゃいましたように、日本の教育が誇るべき教育活動の一つであるかと思えます。特に、現在、地域が様々に激変していく中で、自主的・実践的に人間関係を作りながら資質・能力を高めていく活動というのは世界的に

求められている。そういったものが日本で戦後の中で培われてきたこの歴史を大切にしながら、この時代にどうしていくべきかというこの大切な会議に関わらせていただくことを、大変に光栄に思っていると同時に、背筋が伸びるような気持ちがしております。皆様の足を引っ張らないようにしてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

#### 【脇田委員】

福岡教育大学教職大学院の脇田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私は今年の4月から実務家教員として教職大学院の方に勤めておりますが、それまでは36年間、小学校の担任として、学校校長として、また、教育行政にも関わらせていただきましたが、ずっと特別活動を中心に研究をさせていただきました。いろいろな学校現場に見られる教育課題を解決していくのに、特別活動は本当に機能するんだということは、私は自分なりに実践を通して声を高く言っているつもりではございますが、なかなか現場は、そんなに特別活動を重視していないところもあるようで、それは自分たちが指導していくときに何か問題があったのではないかなと反省をしつつも、何かこれからの特別活動をそれぞれの学校で教員が積極的に取り組んでくれるように、この会議でも努めていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

#### 【貝ノ瀬主査】

では、これより議事に入ります。

本日は2点ございまして、一つ目は、特別活動を学ぶ本質的な意義について、二つ目は、社会に開かれた教育課程についてという、この2点で議事を進めたいと思っております。

議事の流れといたしましては、前半の約1時間を一つ目の議題であります特別活動を学ぶ意義ということで御議論いただきまして、残りの約1時間を二つ目の議題であります社会に開かれた教育課程ということで議事を進めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

まず、それぞれの議題の論点につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

**【合田教育課程課長】**

事務的に御用意させていただきました資料について説明をさせていただきます。教育課程企画特別部会の論点整理という資料がございます。ちょうど27ページの下の方に育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた日本版カリキュラムデザインのための概念という図があります。

前回、私どもの方から、8月の教育課程企画特別部会の論点整理について御説明をさせていただきました。大変重要なポイントといたしまして、このワーキンググループでも御指摘がございましたように、今後の学校教育の在り方として、各教科等の縦割り、あるいは知・徳・体の縦割りといったものを乗り越え、何を知っているか、何ができるか、個別の知識・技能、知っていること・できることをどう使うか、思考力・判断力・表現力等、そしてどのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか、主体性・多様性・協働性、学びに向かう力、人間性などという三つの柱で各教科等の構造を明確にすることによって、子供たちの資質・能力を育てていくという構造で捉えていこうというのが8月の教育課程企画特別部会論点整理の基本的な考え方でございます。前回は、その報告と、それから本ワーキンググループにおける御議論を行っていただきました。

資料5を御覧ください。個別の御説明は省かせていただきますけれども、例えば資料5の1ページ目一つ目の丸のちょうど真ん中あたりで、資質・能力について、特別活動については、それだけあやふやだということがあったのではないかと御指摘や、下から二つ目の丸の下から2行目で、社会への接続を考えた資質・能力論というのは、特別活動にとって非常に重要なのではないかと御指摘、それから最後の丸の下から2行目で、いわゆる機能論でコンテンツを考えてきたが、今後は資質・能力ベースでもう一度精査してみる必要があ

るという御議論をこのワーキンググループでも賜ったところでございます。

その御議論を大きく整理をさせていただきますと、特別活動でしか育めない  
と申しますか、特別活動でこそ育める資質・能力というのは一体何かという観  
点、それから先ほどの御意見にもございましたように、それが実社会や実生活  
とどのように関わるかということをつえ直そうという御指摘を前回頂きました。  
た。

その上で、資料4を御覧ください。先ほどございましたように、特別活動に  
は幾つかの活動がありますが、その活動の特質と、実社会・実生活に置き換え  
るとどう考えられるのかということ、それから特別活動において育成すべき資  
質・能力ということで整理をさせていただいているものです。

学級活動あるいはホームルーム活動につきましては、同じ年齢の学級という  
規模の中で諸課題に対応する活動ということで、これは実社会・実生活に例え  
ますと、身近な生活集団、例えば家庭とか職場といったものが考えられるので  
はないかと整理をしています。

それから児童会（生徒会）活動でございますが、これは異年齢を含む全校を  
対象とし、よりよい学校生活づくりに参画するとともに学校生活の充実と向上  
を図るという観点で行われているもので、例えば実社会・実生活では、自治体  
あるいは議会といったようなものが関わってくるかと思えます。最近、主権者  
教育ということで、公選法の改正に伴って、様々な議論がなされておりますけ  
れども、このように自治体や議会というものにも置き換えるという観点から申  
しますと、例えば児童会長でありますとか生徒会長の選考というものについて  
どう考えるかというものも議論としてあろうかと思えます。

それからクラブ活動でございますが、これは同好の異年齢の集団ということで、  
個性の伸長を図るための様々な活動ということで、これも実社会・実生活  
では、同好会あるいはサークル活動というものに該当するのではないかとい  
うことで整理をさせていただいております。

それから学校行事は同年齢の学年の場合、あるいは異年齢の全校の場合ということで、学校生活に関わる体験的な活動ということでございますが、実社会・実生活では、地域の活動、旅行、ボランティア活動などが該当するのではないかとということで整理させていただいております。

これらの諸活動を通じて育むべき資質・能力というところでは、一つは人間関係を形成する力というところ、これも個人と個人の関係で、集団活動を通じて望ましい人間環境を形成する力ということでございまして、一番下の段落では、発達の段階に応じて受け入れる価値観や個性などの多様性が高くなり、コミュニケーションを図る場面も多岐にわたるといふ、その発達の段階に応じた性質があるのではないかとということ。

それからその隣でございますが、社会に参画する力につきましては、集団活動を通じてよりよい学級生活づくり、学校生活づくりに参画していく力、また、協力して諸問題を解決しようとする力ということで、これは個人と集団と捉えることができる。その上で発達の段階に関しては、発達の段階に応じて、社会において解決すべき課題が複雑になり、自分の果たすべき役割が具体化する、役割を果たすべき集団も大きくなるという特質があろうかと存じます。

それから一番右側でございますが、自己を生かす力ということで、集団活動を通じて自己の理解を深め、場面に応じてどのような行動が適切か、自分で考えて、決定し、実行する力ということで、これは個人自らの力をどう高めていくかという観点から、発達の段階に応じては、自己の能力や適性の理解が客観的にできるようになり、それを受け入れて主体的に自己を伸ばすことができるようになるという特質・特性があるということで整理しています。

その上で資料3、その前のページでございますが、カラーの1枚紙でございます。先ほど、それぞれの活動につきまして、実社会・実生活に置き換えるという観点と、特別活動において育成すべき資質・能力というものを示しましたが、これを幼児教育から小中高等学校と、学校段階別に整理するという議論

のイメージとして作成をさせていただいたのが資料3でございます。一番上には、白いダイヤが人間関係を形成する力（個人と個人）、丸が社会を形成する力、あるいは社会に参画する力（個人と集団）、それから四角が自己を生かす力（個人）の力をどう伸ばすかということで整理をしています。

一番下の幼児教育が自立心ということで、自分のことは自分で行う、それから自分の力で最後までやり遂げる、あるいは協働性ということで、積極的に関わり、それから分かり合う、一緒に遊びを進めていく、役割を分担するということが議論されているところです。

それを踏まえて、小学校におきましては、人間関係を形成する力（個人と個人）に着目しますと、小学校では助け合ったり協力し合ったりして相手を信頼し合う、人間関係を作る。それが中学校では、他者の個性を理解する、積極的にコミュニケーションを図る。高等学校では、他者の価値観や個性を受け入れる。時、場所、場面に応じた適切なコミュニケーションを図るという形で高度化していくのではないか。

それから社会を形成する力、あるいは社会に参画する力（個人と集団）という観点からは、小学校の低学年では問題や課題に気づき、解決方法などを話し合っ  
て決め、役割分担をするということでありますが、中学校では課題について把握し、合意形成を図る。それから高等学校では課題を見付け、合意形成を図り、なおかつ自己の果たすべき役割を考え、主体的に行動する、責任ある行動をとるという形で高度化をしていくのではないか。

それから四角の自己を生かす力ですが、小学校では生活を改善する。それから中学校では自己のよさ、個性、置かれている環境を理解する上で、将来を見通して自己の生き方を選択することができる。高等学校では、主体的に自己の生活や自己の関わりを改善することができる、多くの情報を収集整理する、将来を見通して主体的に自己の生き方を選択することができるということで、幼小中高で整理をさせていただいた議論のたたき台としてお示ししたものです。

なお、お手元にA3判の、未定稿ということで委員限りということで配らせていただいておりますのが、先ほど論点整理でもお示ししました資質・能力の三つの柱、個別の知識や技能、それから思考力・判断力・表現力、それから学びに向かう力、人間性等ということで、この三つの観点から先ほど発達の段階を踏まえて、特別教育活動において育むべき資質・能力というものを整理するとすれば、こういうことが考えられるのではないかとということで整理をさせていただきました。

特に個別の知識や技能というところでは、コミュニケーションを図る方法の知識・技能、あるいは合意形成の仕方、あるいはルールやマナーやその意義についての知識、あるいは決まりや社会習慣についての知識・技能といったものを思考力・判断力・表現力と対応するような形で理解をする、受け止めていくということで作成したものです。

幾つかの資料をお示しさせていただきましたが、戻って資料1を御覧ください。今申し上げましたように、この論点整理を踏まえて、本ワーキンググループで議論すべき資質・能力の三つの柱と、それから特別活動において育むべき資質・能力ということも踏まえ、かつ前回の御議論を踏まえまして、検討事項ということで作成させていただいたものが資料1でございます。

先ほど、主査からもお話がございましたように、議論として二つポイントがあるのではないかとということで作成しております、一つ目は特別活動を学ぶ本質的な意義についてということです。先ほど見ていただきましたように、論点整理におきましては、各教科等で育まれた力を当該教科における文脈以外の実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てていくという観点から、相対的観点から教育課程の構造上の工夫が必要であって、その一つが特別活動であるという位置付けです。特に社会参画につながる取組ということで、論点整理では言及がなされているところです。

現在、各教科等におきまして、それぞれの固有の本質を踏まえて、その教科

等において育まれる資質・能力，構造化を行っているところで，その中における特別活動の意義・役割を考える必要があるかと存じます。前回，御指摘，御議論があったとおりでございます。これを踏まえ，特別活動においてこそ育むことができる資質・能力をどのように捉え直すべきかという点，それからその際，児童生徒の発達の段階に応じて育まれる資質・能力をいかに伸ばし，高めていくかという観点から，どのような構造にすべきかということにつきまして，資料3，それから委員限りの三つの柱の資料，それから資料4といったものを参考にさせていただきながら，御議論，御指摘を頂ければと思っております。

二つ目は，社会に開かれた教育課程という観点でございまして，これは前回，御報告を申し上げましたように，論点整理におきましては，社会に開かれた教育課程という観点が極めて重視をされているところです。その重要な点として，学校教育の目標を用い，教育課程を介してその目標を社会と共有していくという観点が一つ，それから二つ目には，学校教育において生まれ，あるいは社会において自らの人生を切り開いていくために必要な資質・能力とは何かということについて，教育課程を明確化して育んでいくという観点，それから三つ目には，学校教育に学校外の様々なリソースあるいはネットワークを取り入れていくという観点，この三つが社会に開かれた教育課程ということで，今回の改訂の重要な考え方，理念となっているところです。

資料1の2枚目ですが，集団活動そのものを通して各活動を行うことが特徴である特別活動の性格や，特別活動が集団や社会の一員としてよりよい生活，人間環境を築こうとする態度の育成等を目標としていることを踏まえ，社会に開かれた教育課程を実現していくという観点の上で，その意義や役割をどのように考えるのかという点について御議論いただければと思っております。

特に，先ほど資料4におきまして，特別活動の様々な活動が，実社会や実生活に置き換えるとどのように捉えられるのかということで資料をお示ししましたが，そういったことも見据えながら，教育課程を通じて，どのような目標，



あるいはどのような資質・能力を社会と学校教育で共有するかという観点で、その重要な要としての特別活動という観点からの御議論を賜れば有り難いと存じております。

**【貝ノ瀬主査】**

ありがとうございました。

では、まず一つ目の特別活動を学ぶ本質的な意義ということで、まさに本丸に関わる議論をしていきたいと思えます。示された論点につきましては、ただいまの説明、そして配布資料を踏まえて、各委員の方々から御意見を頂戴したいと思えます。

**【脇田委員】**

資料4に示された人間関係を形成する力、社会に参画する力、自己を生かす力ということを考える前に、特別活動というのは何なのかということ考えたときに、全部枝葉を切り落として最後に残っていくのは自発・自治とか、自主・実践とか、そういうものではないのかなと思えます。それは当然分かり切っていることであつたとしても、どこかにその自主的・実践的に、前回の改訂から自己を生かす能力というのが入ってきたわけで、道徳的な指導の実践の充実ということから入ってきたわけですが、それまでは自主的・実践的な態度を育てるというのが究極の目標だったのではないかと思うのですが、そのあたりが見えてこない、特別活動なのか何なのか分からないと私は思えます。それがどこかで支えているのか、それを貫いているのか、必ずそれは自分から進んで行ふとか、自主的・実践的に人間関係を形成する力、そこは進んでという言葉がありますからそうなのかもしれませんが、そのあたりを表記する必要はないのかなと思えます。

**【三浦委員】**

非常によくまとめていただいたなと思っております。しかしながら、やはり私はこの間ずっと見ていて、特別活動のバックボーンといいますか、寄るべき

根拠というのは非常に弱いなと考えていて、どうしても特別活動の運営というのが教師の感覚とか思い付きに寄ってしまうことが多いのではないかなと思っ  
ているところです。私なりにずっと考えているのは、シチズンシップ・エデュ  
ケーションというのが21世紀になって非常に、あちこちの国で声高に叫ばれる  
ようになってきたかと思いますが、もしかすると日本の特別活動というのは、  
そのシチズンシップ・エデュケーションの実践の場としてずっと機能してきた  
のではないかなと思っ  
ているところです。例えば集団と個人の関係であるとか、  
あるいは個人と個人の関係とか、そういったものを、いわば学級とか学校とい  
う社会の中でどのように作っていくのかということをお子  
供たちが自分たちで考  
えて、自分たちで実践してというのは、非常にシチズンシップを作っていく上  
で大きな役割を果たしてきたのではないかなと思っ  
ております。そういった意  
味から、学級、あるいは学校というものを一つの社会として考えて、その中で  
子供たちがどういった権利を果たせばいいのかとか、どんな義務を果たさなく  
てはいけないのかとか、その中で平等性をどう考えるのかとか、あるいは相互  
に支援するとはどういったことなのかとか、そういったことをしっかりと考え  
ていくような体系立てがあると非常に有り難いなという印象を持ちました。

#### 【恒吉委員】

今のお話とも少し関係するのですが、こちらの方のOECDの政策対話でもあり  
ますが、今、世界各国で、狭い勉強だけではなくて、全体の社会性とか感情教  
育とか、そういうものを含めトータルで育てていかななくてはという流れが多分  
あると思うのです。その中で日本の特別活動というのはカリキュラムの中に位  
置付いている一つの珍しい例として、ある種の先駆性があると思うのです。こ  
このところ国際発信の方に関係しているもので、発信するに当たって、海外の  
教育者などに説明したときに、感覚的で分からないという話がありましたけれ  
ども、それと同時に、例えば掃除の当番みたいなのが出てくると、全体主義で  
も掃除をやらせることはできるという話が出てくるのです。先ほど自発・自治

という話もありましたけれども、やはり全体主義の下での掃除と、そうではないところの掃除とを分けている、その部分が非常にクリアに出てくるといいかなという感じはします。

**【藤田委員】**

2点ございます。1点は、今回おまとめいただいた資料3もそうですし、あと資料4などもそうですけれども、人間関係を形成する力、社会に参画する力、自己を生かす力というのは非常に分かりやすく、そのとおりでなと思って拝見はしたところですが、その下に個人と個人、個人と集団、個人というようにキーワードを付けていただいているのですが、このキーワードが一人歩きをしたときに、特別活動の本質と若干ずれてくるのかなという若干の違和感を抱きました。望ましい集団活動を通してというのが特別活動の本質だとするならば、自己を生かすというのも個人の自己完結型ではなくて、社会に参画し、また人間関係を形成しつつ自己を生かしていく。一人で生かしていくのではなくて、社会の中で生かしていくという観点が必要かと思います。そういった意味では人間関係を形成する力、社会に参画する力に両方にまたがるベースとなる力と考えてしまってもいいのかなと考えました。ここから先は、全くの個人の思い付きですけれども、やはり18歳の選挙権なども、社会参画などもありますので、このキーワードの中に社会という言葉も欲しい。人間関係を形成する力が個人と集団、社会に参画する力が個人と社会、そしてその二つにまたがる力として自己を生かす力と考えてもいいのかなと思います。

2点目ですけれども、知識基盤社会といわれる今日の中にあって、特別活動の大きな意味は、そういった中で学業と進路、特に高等学校と中学校の中に入っておりますが、そう呼ばれてきた学びを将来につなぐ力、こういったものが必要ではないかと強く思っています。何らかの論点整理の中で、学ぶ意欲であるとか学び続ける力であるとか、そういったものを打ち出していくことができるか。例えば中学・高校にございますように、学ぶことと働くことの意義の

理解，特に学ぶことの意義の理解，それを教科あるいは総合的な学習の時間等の関連を図りつつ子供たちに提示し，子供たちの話し合い活動等を通して気付かせていくという特別活動の培ってきたよさを，どこかに表に出して言えないかなということを感じました。

#### 【生重委員】

昨日，中教審の総会がございまして，チーム学校の答申が大臣に手渡されたのですが，その中の資料で，これはまだこれから始まっていく審議の資料として，教員養成のプログラムの資料が見通しとして示されたのですが，気になったのが，特別活動が入っている中段で，道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導教育相談等に関する科目となっているのですが，私は特別活動はとても重要だと思っているのに，特別活動というのを1行加えてもらえないと，教員養成の段階で，そこの部分がおざなりになる気がしました。今でさえ，私が数多くの学校に関わっておりまして，特別活動がいかに大切にされていないかということを実感することがございます。前回の会議のときにも申し上げましたが，ここに論点整理されている内容は，やはり人の生き方としてのキャリア全般のことを示しているように思うのです。文部科学省が示しているキャリア教育の小学校，中学校，高校における望まじきありようというものと合致する文言がたくさん入っていると思います。そういうところを考えても，特別活動が，これからキャリア教育とともに，子供たちが自分たちで切り開く進路を描いていくという位置付けで，特別活動において望ましい学級，学校，社会に開かれていく，そして自分たちで考えて自発・自治という位置付けにしていくなめには，きちんとした位置付けでこの文言が入って，教員養成課程においても大切に扱われることが重要かと思えます。また，これも私はずっと思っているのですが，教科は教科，特別活動は特別活動と全てが分断されていると思うのです。学校で学ぶことは，社会に開かれるから国語の表現力が必要だとか，英語が重要なんだとか，数学と社会がつながっているんだという意識を子供が

持つこと、前回和田委員がおっしゃっていた、体育祭を通して教員のファシリテートの下で自発性を育てていくということが、私はある意味、理想なんだと思います。そこに突き詰めていくから、子供たち自体が成長していこうと思って学習力を高めていく意欲につながっていくのではないかと思うので、その部分を、教育関係者ではない、普通のお母さんやお父さんが読んでも、ああ、なるほど、こういう力を付けるものなんだ、だから必要なんだ、こういうポイントを置いていくことによって、ほかのものにもつながっていくのだということが、今回の改訂でしっかり打ち出されて、教員がこの時間をいかに有効に活用するかというところを打ち出すべきではないかなと考えます。

**【貝ノ瀬主査】**

ほぼ同感ですけれども、総会で発言するチャンスはなかったですか。

**【生重委員】**

なかったのです。

**【貝ノ瀬主査】**

ではこれから巻き返していきましょう。

**【黒木委員】**

私は小学校で30年余り特別活動の実践を行ってまいりました。思い返してみますと、クラスというところは非常に多様な考えを持つ子供たちが生活しており、一つのことを決定していくのも時として難しい状況にありました。最近、低学年の子供から高学年、そして最近中学生の学級活動を参観してもあまり話合いがうまくいっていない状況がみられます。そういったことを踏まえて、これまでにうまくいった経験を思い返してみますと、1年間の特別活動の実践の中で、子供たちが全体の立場に立った見方・考え方ができるようになり、一人の子供が「本当にこのクラスにいてよかった」と本音を語った瞬間がありました。ですから私は常に特別活動を考えていくときに、目標としています自主的・実践的な態度を育成していくために、四つの領域（学級活動・児童活動・ク

ラブ活動・学校行事)の中で全体の立場に立った見方・考え方を子供一人一人がしっかり身に付けていくことが非常に重要ではないかなと考えています。幼稚園教育要領の中でも折り合いという言葉が使われてており、小学校、中学校でも、やはり折り合いをつけながら物事を決定していくという仕組みを作っていくませんと、なすことによって学ぶを勘違いしてしまい、「特別活動の時間は、ただ活動すればいい」というような考えになってしまわないかと心配なところがございます。ですから、学級活動やホームルーム活動の中で相手の立場をしっかりと考えながら物事を決めていく指導を行うことが大切ではないかなと考えております。

#### 【平川委員】

本校は、来年度、博報財団の支援を受けまして、本校から8人、オーストラリアに無料で留学をさせるということになりました。海外11か国から日本語の先生が生徒たちをそれぞれ4人ずつ連れてまいります。それが来年の4月なのですが、その前段階で、先日、本校に11名の日本語の先生が下見に来ました。インド、インドネシア、スリランカ、ロシア、トルコ、タイ、ブラジル、オーストラリア、イギリスといろいろな国です。学区の小学校でたまたま40周年記念式典という、子供主体で体育館に集まっていろいろな催しをするというのがあり、見せたのです。そうすると、これはすごいということになりました。日本の先生なので日本語でしゃべっているのですが、子供たちがすごいと海外の人が話していました。同時に、先生たちの指導がすごいと。この方々はやはり先生だなどと思ひまして、ふと、そういえば日本の特別活動は、海外の方から見ると、特別活動があるからこんなにすごい指導ができて、こういうことができるのだなどと思ひました。これは、特別活動というカリキュラムを輸出できそうだと思ひたのですけれども、生重委員がおっしゃったように、教育に携わる者は分かっているけれども、私も民間人校長ですから、その前までは特別活動って何だろうと本当に思ひていまして、特別活動を略して特活、なるほどねなんて思ひて

いたのですが、本当に普通のお母さんはやはり特別活動は分かりませんし、何が特別活動かというのも分かりません。そういう意味で、海外の方が分かりやすいような表現で、この育成すべき資質・能力とかカリキュラムも含めて、説明もするのが、一番やはり分かりやすいのかなと思いました。そうすればそのままそれが海外の方にも利用してもらえるのではないかと考えています。

ところで、私は中学校の校長をやっておりますけれども、こういう学習指導要領を見ても、小学校でこの特別活動とかの学校行事の目標と内容のところ、小学校で10、中学校で17、それから高校のホームルーム活動では18ということで、すごく多いのです。現場の教員は、盛り込み過ぎるとシャッターを下ろしてしまいます。やはり盛り込み過ぎず、エッセンスだけしっかり入れる。あとは学校の現場とか地域とか子供の特性を生かして、学校がきちんと考えるということがやはり大事かなと思っており、盛り込み過ぎてしまうと現場には伝わらないのではないかなという懸念がございます。そのあたり、現場としては御配慮いただけると有り難いかなと思います。

#### 【吉村委員】

私は、社会科、シチズンシップが基盤でございます。その点から2点、申し上げたいと思います。一つは特別活動のこの諸活動、資料4にも整理されているのですが、これはある意味では人間が集団を組織して、その中で集団を運営しながらいろいろな問題を解決していく、また自分たちもその中で生きていくというような場で、ある意味では学校教育の中で疑似社会のようなものがきちんと設定されているような場面なんだろうと考えています。そうしますと、主権者教育ということで18歳選挙権が実現することになっておりますが、社会科でそういう政治の仕組み、特に選挙の意義などは学習されていますが、それがなかなか実感を持って生徒が納得して、それがまた社会参画の方まで結び付くようなものになるかという、なかなか難しいというような調査も出ています。そういう観点からいきますと、やはり知識だけで学習したのではなくて、こう

いう特別活動の中で疑似的な、例えば児童会・生徒会であるとか、あるいは学級の運営とか、そういう中で民主的な議論、あるいは代表を選ぶ民主的な選挙というものを通じて、実は自分たちの学級や、あるいは学校の問題を解決していく、あるいはよりよい学級、学校にしていく。そういう体験をすることで、実は知識として学んだ選挙などのシステムのものが実感を持って生きる知識のようなものになっていくのではないかと私は思っているところです。

もう一つは、今、民主的な議論と申し上げましたが、こういう特別活動ではクラスや学校の問題などを議論で解決していくときには、その議論の論理性と もう一つは倫理性のようなものがやはり必要になってくるのではないかと。その中で議論の論理性のようなものは、例えば教科の方で学習するというようなことが既に盛り込まれていると思いますが、やはり民主的な議論、例えば他者の意見も尊重するとか、そういうことは知識としては学んでいるけれども、そういうことが実践の場で実践的に学ばれているかということ、なかなかそれは教科の方では難しい点があると。そういう点で、この特別活動でクラスでの議論、また生徒会や児童会での議論などを通じて、実践的に議論の倫理性のようなものについても学ぶ機会があるということで、この特別活動のある意味ねらいとかそういうところを出していくという考え方があるのではないかなと思っています。

#### 【橋谷委員】

前回の会議から、特別活動で育成すべき資質・能力を分かりやすく簡単な言葉で表す方法はないかと考えていました。そして、特別活動を大切に思っている仲間と話し合いながら、「仲間づくりの力」、それから「生活あるいは社会づくりの力」、「自分づくりの力」というのはどうだろうと考えました。この素案を見せていただくと、人間関係を形成する力、社会に参画する力、自己を生かす力とあり、それぞれ仲間づくりの力、生活あるいは社会づくりの力、自分づ



くりの力と対応していて、同じような表し方だと思い、私自身は大変納得いたしました。

もう一つは、これは藤田委員からの御発言にもありましたけれども、やはり個人と個人、個人と集団、個人というところは、私も少し違和感があります。やはり個人あつての集団ですし、集団あつての個人なので、それを分けるということは、そういう意味ではないのかもしれないですけれども、わかりにくいように感じました。今、私は小学校の現場にいるのですけれども、子供たちに付けたい力を考えますと、これからの人生で様々な問題が訪れようとも、それらを自分で解決できる、解決しようとする自信とかたくましさ、それから、自分はこんなふう生きるんだという志というか、生き方についての思いを持ってほしいと思います。そのためには自分に合った具体的な自己決定する力や自分の目標を設定する力が大切になります。それを育むのは、やはり特別活動ではないかと感じます。

#### 【和田委員】

私はもともと高校の国語科の教員です。高校生が特別活動の時間を考えたときにどう思うかなというのを考えたときに、まず教科と違って教科書がない。そうすると、これを学ばなくてはいけないというような縛りが無いものである。それによく似たのには、総合的な学習の時間があるんですけれども、総合的な学習の時間も特別活動も、教科のように教科書があつて、これをやるということが目に見えていない。その中で、生徒から見ると、結構自由な時間に見えるんですね。その自由な時間の中で、フリーなように見えて、でも、このことを生徒たちが体感しているのは、共同体の中にいる自分ということなのではないかなと思います。先ほど疑似社会というような言葉が出てきました。それから仲間づくりということも出てきましたけれども、そういうものに参画している自分というか、この資料4の中で学級活動、それから生徒会活動、クラブ活動、学級行事と挙げられていますけれども、どれも集団の中にあつてすることなん

ですね。そうすると、やっぱり特別活動の本質的な意義というのは何かというと、共同体、それからコミュニティーに生きる自分というものを体験できる時間ではないかなと思います。

**【貝ノ瀬主査】**

ありがとうございました。

現場を踏んでいらっしゃる委員の方と、それからそうじゃない委員の方で、微妙に発言の言い方は違っていると思いますが、そんなにかい離しているわけではないと思います、ただ、現場の先生が後半続きましたけれども、例えば自分を生かすということであったとしても、自分一人で生かすなんてことはできるわけではないということですよね。ですから人間はロビンソン・クルーソーじゃないので、ロビンソン・クルーソーも結局は人とつながり、犬とつながったりしましたけれども、そういうことについても、育成すべき資質・能力のところで、分かりやすいということで個人と集団ということで、一応分けてはあるわけですが、しかしそういう相互関係にあるということがやはり分かるような表現が必要だなということを伺いました。

このたたき台について直接おかしいという御意見はございませんが、もう少しこの辺のところについてどうかということもあれば、それも含めて御発言を頂ければと思います。

**【須藤主査代理】**

発言の前に、生重委員がおっしゃったことを是非お願いしたいと思います。第1回の会議のときに、私も何人かのほかの方々をお願いをさせていただきましたが、大きなぼたんの掛け違いが出たら大変なことです。よろしく申し上げます。

さて、ただいま御説明を頂いた資料について、そして主査が本丸とおっしゃったその2点についてお話をさせていただきたいと思います。

資料3, 4, そして委員限りの資料の御提示・御説明を頂きました。特に資料

3に示されている、この記号で示した三つの力というのはどういう性格付けなのだろうかということです。そういったことから、皆さんから、ほかの委員の方々から御意見が出ているものだと、そのように受け止めさせていただいてます。

この性格付け、つまりこれが出てきた論ですけれども、例えば、私どもは教育活動でやっている、それは人格の完成を目指して特別活動で育てる力ということになるわけです。人格の完成というのは、問題解決能力を中核と我が国はしているわけですし、そのための自主的・実践的、自発的・自立的な集団活動を通して、そしてその活動の中で子供たちの資質・能力を養い、その結果、究極の目標として、こういう力が特別活動では付くと、そういうロジックといたしますか構造が、当然のことながら求められてくると私は思っています。

そうしたときに、この三つの力は、バランスといたしますか、人間関係と社会を形成する力、自己を生かす力、この三つのうちの二つ、後半の、後半といたしますか、それは究極目標の表記になっています。特別活動を通してこういう力を育てる、こういう力が、いわゆる学校教育目標、小・中学校でいうなら21条、高等学校なら51条で示しているそういう力を育てる。そしてその結果、特別活動では究極目標、こういう力が付くんだというロジックといたしますか、そういうものに基づく内容でないと、この後、それぞれの小・中学校の具体的な学習指導要領の作成に係ってきます。解説書、その説明をどのようにしていくのかという部分も、我々は当然想定をしておく必要性があらうかと思えます。

特に委員限りでお預かりといたしますか、拝見をさせていただいた三つの柱に沿ったということであるわけですが、個別の知識・技能、この部分は特別活動ならではのわけですから、皆さん、おっしゃっているように、いわゆる自主的・実践的な話し合い活動や実践に関わるものが特別活動ならではの、そして自発的・自立的に関わる内容が特別活動ならではの個別の知識・技能で当然なくてはならないのらうと思えます。そして学びに向かう力、人間性、これは調

和のとれた人間性，いわゆる社会的な実践力に必要とされる資質・能力という構造を是非御検討いただければ有り難いと思います。

本丸についてですが，特別活動というのは歴史的な経緯とか意義，そんなものについて何か御説明する機会があれば，是非申し上げさせていただきたいと思いますが，いわゆる教科外領域として位置付けています。次回の学習指導要領においては，特別活動のみが教科外であるわけです。ということで特別活動の意義というのは，まずもって教科外領域としての意義，それを明確に達成する，それが特別活動であるということに当然ならなければならないということですね。それについては生徒指導の発達のなものを領域とする機能を持っているということであるとか，教科というのは文化財，主として我が国においては教科書ということですけども，それを媒介として先生と子供が間接的に関わります。教科外というのは直接子供と，集団活動を通して先生が作り出していくわけです。そういう教科外としての特質，それが特別活動である。したがって前回の1回目でもおっしゃった委員がおいででしたが，学校教育全体を織りなすと，全てに関わるんだと，いわゆるヒドウン・カリキュラムとの関わりも特別活動，教科外だからこそそういう特質があるんだということ，そして特別活動固有の特質としましては，先ほど申し上げましたように学校教育，人格の完成に直接関わる，そして歴史的な経緯も含めて教員の職務としてのそういう教育学的な意義，文脈がある。日本型教育としてです。子供たちにとっては集団活動を通して自己の確立を図る，充実した学校生活の実現，個と集団との関わりを学べる，体験できる，問題解決的な実践力を体得できる，人間関係を学び，思いやり，豊かな人間性，そういった意義，さらには教える活動として取り上げる学校教員にとっては，学級経営や生徒指導，その実践の場としてそういう意義，非常に重いものがあるわけですね。そういうものが総合的に一つの論として明確にすることも，やはり分かりやすい特別活動につながる。特別活動は何で学級活動，学校行事，生徒会・児童会，クラブ活動，これが一括して，

何で特別活動なの、何で一括されるのとか、そういうものが十分に説明されてきていないというか、それを分かるようにしていく必要があるのではなからうかと思っています。特別活動があるから子供たちは学校が楽しいわけです。是非そういう観点での意義を明確にしたいなと思っています。

#### 【小林委員】

特別活動を学ぶ本質的な意義は、吉村委員もおっしゃったように、実感することにあるかと思います。身近な社会である学級の問題を自分たちで発見し、それを解決する手立てをみんなでアイデアを出し合い、話し合っ決めて、実践し、実際に、その問題が解決されたという実感を持つこと、それが行動化につながると思います。ただし、それは失敗も含めてです。うまくいかない場合もあります。じゃあ今度はどうしたらいいだろうかと、試行錯誤を繰り返しながら、自分たちなりの解答を見付けていくということが、特別活動の本質的な意義だと思います。

それから、特別活動のイメージにおける社会を形成する力について、高校、中学、小学校と、それぞれ学校というキーワードがありますが、小学校は学校生活とあって、中学校では学校となり、高校では学校全体となっています。この違いを、先生たちがきちんと理解できるように伝えていくことが必要だと思います。

#### 【藤田委員】

今、分かりやすくというお話がありましたが、これは当然必要なことだと思います。これから後半、話題になっていく社会に開かれた教育課程、在り方を考えていくときに、特に特別活動の場合ですと、ボランティア活動ですとか職場体験、インターシップ等の様々な機会に地域社会、家庭の方々の御協力を得なくてはいけないということで、分かりやすいということは必要なことだと思っています。そういった中で、私、前回、実は欠席をしたことでこのような質問をさせていただくのですが、素朴に分からないことがございます。先

ほどから話題になっております，資料3や4でございます，この人間関係を形成する力，社会に参画する力，自己を生かす力という三つの資質・能力と，それからA3カラー刷りで委員限りの資料について，特別活動に限らず全ての教科等にわたって，今新しい目指すべき学習指導要領の三つの柱といわれている，この個別の知識や技能，思考力・判断力・表現力，学びに向かう力，人間性，特にこのような三つの切り方，たまたま3と3なので，私個人はこれを，何の説明もなく渡されると混乱するなという印象を持ちました。この二者をどのように捉え，また役目をどのように説明していけばいいのかということについて，本当に後ろに戻ってしまうような話ですけれども教えていただくと大変助かります。

#### 【合田教育課程課長】

各教科等におきましては，これまでも様々な力，歴史的なものの見方や，科学的な物の見方などを育んできたところです。特活においては，人間関係を形成する力，あるいは社会に参画する力，あるいは自己を生かす力と，先ほど仲間づくり，社会づくり，自分づくりという話でしたが，これは一つの大きなポイントとして今まで取り組んできたことです。そのことを前提にしながら今各教科等のワーキンググループでお願いしておりますのは，これまでの特活，あるいは各教科等の蓄積を生かした上で，これを教科の枠で考えるだけではなくて，子供たちにとって育まれるべき資質・能力を考えたときに，中教審の教育課程企画特別部会では先ほどの知識・技能，思考力・判断力・表現力，それから社会とどう向き合うかという，この三つの観点で捉え直していくべきではないかという御議論を頂いているところです。その意味においては，いわば縦軸・横軸というような，クロスするような構造になるのかもしれませんが，こういった特活のこれまでの蓄積を踏まえながら，それを各教科等とつなげる，あるいは先ほど話があったように，各教科等における学校教育活動のいわば基盤として位置付けるという観点から，この教育課程企画特別部会の論点

整理で示された三つの資質に位置付けるとするとどういったイメージが構築できるのかという御議論を各教科等と同様に現在、特別活動でもしていただいていると御理解いただければと思います。

**【藤田委員】**

大変明確な御説明で理解はしたのですが、縦軸・横軸というような御説明ですと、確かにそのとおりかと思うんですが、いわゆる一般の教科等におきましては、この三つの柱に沿った能力の提示ということが中核になっていて、それに並行する縦軸ないしは横軸、織りなす糸みたいなものというの提示されていない、非常にシンプルな形になっているわけです。特別活動だけが織りなす縦横の関係という複雑なものになってくるということに関して、若干外に打ち出すときに、何か特別活動は分かりにくいな、教科書もないし、自分たちで作らなくてはいけないし、能力論も分かりにくいしというのは、マイナスかなという印象を持ちました。

**【貝ノ瀬主査】**

これは特別活動だけこういう整理の仕方を考えているということではなくて、これから議論が進んでいく中で、ほかの教科もこういう観点で整理ができるのではないだろうかと思います。ですからこれは委員限りで、結局のところもう少し議論をして確認をしていきたいというところですので、今後また引き続き御意見を賜りたいと思います。

引き続き二つ目の社会に開かれた教育課程という議題に移りたいと思います。先ほど示されました論点、それから資料説明を踏まえまして、再び各委員の皆様から御意見を頂きたいと思います。

**【脇田委員】**

このことを考えていくときに、特別活動は一体どんな子供たちを育てようとしているのかと素朴に学校長が考えたときに、特別活動をどのように機能させていこうかという、いわゆるカリキュラム・マネジメント的な発想をしていく

わけです。だから校長が特別活動はこんな力を、資質・能力を育てるんだということをもっと知っておかないと、特別活動の持っている意義というものを学校で実施することはないだろうなと思います。例えば人間関係を形成する力ということが先ほどございました。具体的に、どうしてその人間関係を形成する力を育てるんだといったときに、いろいろな考え方があるのではないかなと思うのです。ある先生は、子供たちが自分たちの学級の問題を見つけて、その問題について話し合いをする、そして友達と協力して実践することによって最終的に友達との関係はよくなるという理屈付けをされるかもしれないし、そういうことを考えない先生は、友達と仲よくするんだよということを直接教えるのかもしれない。でもやはり特別活動ですから、最初に私が申し上げたように、自発・自治とか自主・実践とか、そのあたりから子供たちが自分たちで問題を見付けるとか、そういう文脈の中で人間関係を形成する力を伸ばしていくという意義が特別活動にあるということを学校長が理解するならば、学校の教育課題を解決するために特別活動をカリキュラムの中に位置付けていくだろうなと考えています。

#### 【恒吉委員】

この社会に開かれたという場合に、多分、日本社会の話をしていると思うのですが、グローバルな時代ですので、日本社会というのはやはり世界に広がっていて、そこで育つ将来の子供たちというのは、世界に開かれている日本社会の中で生きて、そこにとどまるとは限らなくて、違うところに行って生きるかもしれない。だから、ここで書かれた集団だとかそういうものが、閉じたイメージでのものだとすると、それはやはりグローバルな時代の資質という、恐らく教育課程の中では全体的にそちらを向くようになっているものと、少しずつが起きるのではないか。そういう意味でも、例えば世界に開かれた日本社会に開かれた特別活動と考えたときには、その集団はかなり多様なものであって、異質性だとか多様な人々とやっつけていける能力とか、そういうものが少なくとも



意識された議論が必要なのかなと思います。相対的に見ると、日本の子供たちは割と同質的な閉じた集団の中で訓練をされているというか経験がすごく豊富だと思うんですね。一方、異質なところで、割と説明しなくてはいけないような場面というのは、それほど経験することができていないので、そういう意識が入ってくるといいかなと思います。

もう一つ、これは感想なんですけれども、先ほどから何で成果を示すかということがあがっていますが、特に海外の人に説明していますと、何がどういう状態で成功していると言えるのかということと言われるわけですね。分かりにくさの一つの表れになるんだと思うんですが、日本社会の中でも、いいと思いませんけれども、どんどん学力で示すとか、数字で示すとかいった流れの中で、先生方がしっかりした成果を感じられるようなものをどうやって外に向かって説明できるのかということも、もう一つ考えました。

#### 【黒木委員】

以前、ある研究校に赴任しましたとき、PTAの皆様方にお集まりいただいて、歓迎会が行われたことがあります。その際、ある方が私のところにお見えになり、「先生の研究教科は何ですか」と聞かれました。そして私が「特別活動です」と答えましたら、「それって何ですか」と言われました。恐らくその当時は、特別活動についてPTAの方々に十分理解していただいていたものと考えます。そして何を学ぶ学習なのかも伝えきれていなかったものと思います。国語とか算数を研究教科とされている先生のところにはたくさんの保護者が集まっておられたのを今でも覚えています。そういったこともあり、「特別活動の実践をもっと頑張らないといけないな」と思ったこともございます。校長在任中には、積極的に地域の方を授業に入らせていただきました。クラブ活動等に入っていたときには、既成のクラブありきではなく、子供たちがやってみたいクラブ活動を創り、そして子供たちの要望にこたえられるような地域の人材バンクを作成し、いろいろな情報を学校長として収集しながら、できる限

り子供の意見にこたえられるようなクラブの運営をしてきた経験がございます。ですから、社会に開かれたというときに考えることは、まず学校が今、以前に比べると地域に対して垣根が低くなり、いろいろな方々が学校に入り、その専門性を発揮していただいているということでもあります。今後も更に外部人材の活用を進めていくことが大切なことではありますが、学校が、地域の方々を学校教育に参画してもらえればよいという安易な考えではなく、一緒に何を創り出していくのか、そして子供をどう育てていくのかということを確認しながら、学校経営に当たっていくことが必要であると考えます。そうすると保護者の方々も次第に特別活動の意義とか、必要性等を理解していただけるのではないかなと考えます。

#### 【生重委員】

黒木委員と大分かぶってしまう発言になるかもしれませんが、異なる表現ですので申し上げます。コミュニティ・スクールとか、それから地域学校協働本部のように、これからは地域と連携した学校経営、学校運営が全体像として目指されていくわけですし、コミュニティ・スクールの方の審議の中でも、校長先生のリーダーシップの下に、地域で育てたい子供の姿とか、教育を通して力をどう付けさせていくのかとかいうことは、地域と共有されていかなければいけない。その賛同を得た上で、共に学校経営をしていくということが、これからの学校経営に求められる像だとするならば、全国的にコミュニティ・スクールを受け入れてくださらないところもまだまだ多いんですが、そうしていかないと、子供たちを社会全体で育てていこうよという体制になっていかないと、全部を学校だけでやると言っていた時代を早く脱出しないといけません。学校教育、家庭教育、社会教育という本来の三位一体を活用する、この文章の中に書かれている社会に開かれた教育課程を実現する上で、特別活動はその全てのパイプ役になるのではないかというくらい重要だと思っておりますので、地域人材を活用することも、あらゆる意味で学校経営をしていく意味でも、それか

ら子供たちの独り立ちに向けての教育全般においても、いろいろな人が学校の中に入ることを実現できる時代にしていけたらと思います。さきほど私は、保護者に分かりやすいようにと言ったのですが、私の知っている中で、そういうものを一切読まないで教員をやっている方たちが随分いらっしゃるので、ちゃんと読んでもらいたいなと思います。ちゃんと読んだらすごくいいことが書いてあるのに、どうしてちゃんと読まないのかなと思います。ちゃんと読みたくなるようなものが、文章になってほしいなと望んでおります。

#### 【橋谷委員】

視野の狭い話になってしまうかもしれませんが、学校をよくすることが地域をよくすること、地域をよくすることが社会をよくすることだと子供が語れるようになることが大事かなと思います。それと同時に子供たちが自分の言葉で特別活動を語るということが大事だと思います。川崎市立学校にはより一層地域に開かれた学校づくりの推進を目的として、保護者、地域住民、子供、有識者、教職員等の代表が参加する学校教育推進会議という会議があるのですが、その中で、子供が語った言葉ですけれども、「よりよい小学校にするために、私たちは委員会活動などを通して頑張っています。でも、よりよい小学校にするためには、まず一つ一つのクラスがよりよくなっていく必要があります。だから学級活動で、みんなで話し合っただけでやることを決めて、集会活動をしてクラスのきずなを深めています。そうやってクラスがよりよくなっていけば、学校がよりよくなっていくと思います。そして学校がよりよくなっていけば、地域ももっとよくなっていくと思います。」

こういうことを語れる子供を育てることが、特別活動の社会に開かれた教育課程で求められているところかと思います。

それから、恒吉委員が先ほどおっしゃった、外国に、世界に開かれる特別活動ということについては、「クールジャパンTokkatu」のような形でもっと広めていくことができればいいと思っています。

### 【吉村委員】

主権者教育にこだわっているのですが、社会に開かれた教育課程ということで、一つは社会とともに子供を育てていくという意味があるのかなと思っていますが、もう一つはやはり学校教育で育っていった若者が、社会に入っていくって、しかもその社会を担っていきける、社会に参画できていきけるという意味でも社会に開かれた教育課程だという意味があるのだらうと思っています。そういう点で特別活動は、先ほども実感というものをキーワードでお出ししましたが、疑似社会というものを学校にどれだけ取り入れられるかということなのだらうと思います。これはやはり小学校、中学校、高校と、やはり年齢段階、発達の段階がありますので、これは分けて考えなければいけない点もあるとは思いますが、例えば全国各地で子供議会のようなものが実施されて、子供たちが地域のことを考えて、それを子供議会で話し合う。場所によっては、議員は子供たちだけけれども、それを聞く方の市や町の執行部は、市長以下、町長以下、本物が並んで議論をしているような子供議会を開いている自治体もごさいます。そういう場で、例えば子供たちの提案などは、結局、中学生や高校生並みの提案ではありますが、本物の執行部の方からは、例えば、それは予算の制約があるとか、それはもうやってみただけどもというふうに、子供相手の答弁ではなくて、きちんとした大人なりの答弁をすることで子供たちに向き合っている。そうすると子供たちはしゅんとなるかと思いきや、そういうところがまだ僕たちに足りなかったのかということで、更に勉強しなくてはいけないとか、もう少し調べて考えないといけないというふうに子供たちが伸びていく。そうした実践を日本全国でやっているところがもう出てきています。このように、学校の間だけでは難しいことを、自治体と連携しながら、教育課程に社会的文脈を取り入れることが、社会に開かれた教育課程として必要な部分ではないかなと思っています。

### 【藤田委員】

社会に開かれた教育課程を考えるときに、恐らくは先ほど前半で議論になりました本質的な意義、特別活動を通してどのような力を育てるかということと多分、表裏一体で考えないと難しいのではないかと思います。何人かの委員の皆様方が既に御指摘のとおり、どのような力を身に付けさせたいかという議論を地域とともにやっていると、恐らく特別活動としてのよさというのは半減していくのではないかと考えます。特に学校や地域の特性であるとか子供の実態、あるいは地域の実情、そういったものを踏まえて、地域とともに身に付けさせたい力を先生方の専門性とリーダーシップの下で作っていくということが多分求められるでしょう。そのときに、では国ができることは何かと言えば、詳細な能力論の一覧を小学校段階、中学校段階、高等学校段階として提示すべきことではないんだろうなということをまず申し上げたいと思います。実はキャリア教育に関係している立場から申し上げますと、以前、キャリア教育で身に付けさせたい力は4領域8能力と呼ばれていました。比較的詳細な、小学校低・中・高学年、それから中学校、高等学校と身に付けさせたい力を提示したわけですが、きれいにコピー・ペーストが各学校で進みました。実はつい数日前、独立行政法人教員研修センターでカリキュラム・マネジメントの研修があり、キャリア教育を通してどのような学校づくりをしていこうかという話があった、何人かの委員の先生があるグループで話していたのですが、山間地域の学校の校長先生が持ち寄ったその学校のキャリア教育の全体計画と、都内の非常に都心の学校にある学校の全体計画の能力論が全く一緒だったんですね。これはおかしいよねって二人で笑い合っていたんですけど、元凶は何かというときになったときに、結局、4領域8能力論、国が示した例なんですね。そういった例を示せば、いかに例だといっても国が示したものだからということになってくる。そうなってくると、豊かな地域性ですとか子供の実態というのは吹っ飛んでしまう。恐らく私たちが考えなくてはいけないのは、そういった中で学校がカリキュラム・マネジメントを前提とした能力論をどう設定しうるの

か。設定するまでの手立てをきちんと示していきながら先生方を支援することだろうなということでございます。

次に、これは御検討のお願いなんですけれども、たまたまキャリア教育では社会参画、社会的な自立という能力論で基礎的・汎用的能力というのをとりあえずは学校の現場の先生方にお示ししているところです。懸念するのは、特別活動では何とか力、キャリア教育では基礎的・汎用的能力など、いろいろな何とか力が出てくると、かつてのように何とか教育がたくさんあって困るということとまた同じようになってしまわないか。ですから、現場の先生方に疲弊感なく、拒否感なく必要な能力を提示できる工夫というのも今後、このワーキンググループの中でしていく必要があるのかなと、そんなことを思いました。

#### 【三浦委員】

私がこれからお話しすることは特別活動の話なのかどうなのか非常に私自身も不確かなので、そうでない場合は無視していただいて結構なのですが、地域との関連性を考えたとき、特別活動の中に学校行事というのがあって、子供たち自身の言葉で地域の方々、あるいは親たちにどういったメッセージ、主張を伝えるのかというのはとても大きな話で、そういう意味では特別活動の中における文化的内容といいますか、それが非常に大切なのではないかと思っているところなんです。というのは、小学校とか中学校の実践などを持ち寄って、先生方の研究会に行ったときに、例えば秋ぐらいだと学習発表会とか文化祭とか、そういったものをこんなふうに指導したといったような先生方の実践が報告されるのですが、ほとんどが、いかに生徒の自主性を生かした指導をしたかという方法論にとどまっていて、じゃあ自主的な活動でもって子供たちにどういった中身に取り組ませたんですかと、中身に対する議論がほとんどないということに私はとても違和感を覚えています。そういった意味で、もしかするとそれは総合的な学習とか教科の中でやればいい話なのかもしれないのですが、特別

活動の中での子供たちの社会形成と文化形成というのは、車の両輪のような関係にあるのではないかなと思うのですが、そうして見たときに、文化という言葉がここにはほとんど出てこないのですが、場合によってはそういったアプローチというのは必要なのではないかなと思ったので発言させていただきました。

**【小林委員】**

テーマが大きいので、私が勤めている青少年教育施設における集団宿泊活動について、集団宿泊活動が目指すことの社会との共有、地域の人的資源の活用について話します。

集団宿泊活動を行う場合、学校は保護者を対象に説明会を開きます。そこで話される趣旨は抽象的なことが多いように思います。自然に親しみ、協調性を育むといったことです。そして、どんな活動を行い、どんな安全管理を行うのか、連絡体制も含めてですが、そういった集団宿泊活動の内容の話になります。そこで足りないのは、具体的に、この集団宿泊活動をやって子供たちにどんな力を付けさせていくのかといった目標レベルでの話ではないかと思います。そういったことを丁寧に説明することが必要です。説明をするためには、先生方自身も考えなければならない、そういったことが集団宿泊活動の充実につながっていくと思います。

そして、地域の人たちに手伝ってもらおうということです。集団宿泊活動は学校の先生たちの負担が大きいですから、活動の補助であるとか、安全面の補助であるとか、そういったことを、地域の人たちに、学校と一緒に来ていただいてやっていただくといったことも必要かと思います。

それから受入れ側の方ですが、大部分は豊かな自然に囲まれています、その地域の特色を生かした受入れプログラムを作っていくということも必要かと思います。子供農山漁村交流プロジェクトという、子供たちに農林漁業体験と民泊をさせる事業のように、地域の資源を生かしたプログラムを地域で開発し、

学校側に提示していくということも必要だと思います。

**【和田委員】**

特別活動以前の話になるので恐縮ですが、社会に開かれた教育課程って何だろう。高校の先生方の中に、この社会に開かれた教育課程という言葉がふに落ちていくのには、ものすごく私は時間が掛かるだろうなと思っています。以前、開かれた学校づくりというスローガンがあり、学校が地域と、それからいろいろな学校の中に地域の評議員さんたちが入ってくるというようなことがございましたが、その段階を経て、今度は新たに社会に開かれた教育課程を作りなさいと言われたときに、社会に開かれた教育課程って一体何だろうか。今の教育課程って社会に開かれていないのかなと逆から考えてみたときに、この社会に開かれた教育課程の説明の中に、「社会の変化に目を向け」、それから「社会の変化を柔軟に受け止めていく」というような説明が言葉の前になさっております。また、重要な点として、「社会や世界の状況を幅広く視野に入れ」という表現があります。この三つとも、社会の変化をきちんと受け止めて、それを教育課程の中に織り込んでいってくださいよというメッセージなんだろうかと考えておりますが、この社会の変化に目を向けるというのが一番実は学校の先生方の苦手なことなのではないかなと思っています。社会の変化を考えつつ、自分の学校の教育課程を組んでいくということを考えたときに、では、それが特別活動とどうつながるのかと考えてみたら、社会の変化の中で、やはり集団というのが、先ほども出ておりましたけれども、等質集団ではなくて、いろいろな多様な人々が混じっている異質な人々による集団の中での特別活動という、集団とか共同体とか、そういうものを意識させる特別活動であらねばならないのであらうと思っています。

**【杉田委員】**

特活に関わる講義をやっているとして、学級のような集団を学生で作って、特別活動を学びながら、どう問題を解決するかという授業をやっています。それが



学生はできないんです。もめたまま合意ができない。国連がなかなか、平和のための合意ができないけれども、それができないわけです。つまり、そういう能力をどう育てるかといったときに、藤田委員がおっしゃったように、社会に開かれたとか世界に開かれたというのは、世界や社会が求めている人間として必要な能力を共有して育てるということではないかと思えますし、橋谷委員が言ったように、いい学校ができて、いい地域、いい社会、いい世界ができるということだと思えます。学生は、もう18歳を超えているんですよ。正に民主主義の根幹をなしているのは個の確立で、きちんとした主張を持つことです。そもそも主張を持たない人間が多数決に参加すると思うとぞっとしますが、そういうことはもう始まっているわけであり、正にそういう中で、いい生活をどう作るかということでもあります。

先ほど、恒吉委員からも話がありましたが、なぜ日本の特別活動に世界が注目しているかと言えば、ほとんどの国で、もう悩みははっきりしていて、多文化国家で多民族国家ということです。どのように違いや多様性を超えて一緒に生きていくかということはどう教えるかです。人種が違って、性別が違って殺し合っているわけですが、日本ではそういうことはしません。寛容性と、そして謙虚さのようなものを持っているからだと思えますが、そういう意味で、正に違いや多様性をどう超えるかということをきちんと教えていく必要があるんじゃないかと思えます。

そのときに、例えばどんな力が必要なのかと考えるべきで、そのためにどんな活動をするかということと分けて考えるべきではないか。どんな活動をするかなんてというのは分かりやすいわけですよ。地域の人を取り込めばいいわけです。一緒にやればいいわけです。参画してもらったらいいわけです。私は、豊田市の評価委員もやっており、そこはICTが非常に入っていますが、でも大事なものは人間です。地域協働本部も立ち上げていますが、その一歩先をやらうとしています。ヨーロッパの多くが、学校運営をどうするかというときに、そも

そもこれまでは学校が地域にお伺いを立てる手法だったものが、地域がそもそも、そこで育ったら学校のために何か貢献するのは当たり前だと、こういう考え方に変えようという発想に見えました。そのときに、その方法として相談しているのは話し合いなんですね。学校の代表、それから地域の代表、保護者の代表、ここに足りないのが子供の代表なんですね。ヨーロッパに行ったら多くは子供が入っています。まずそういうことを、認めていくべきだと思っています。

ある意味、そう考えていくと、十分な説明を聞かないままに、こういう話をするのは不適當かと思いましたが、この特別活動のイメージ、たたき台ということを見ると、その役割として、何をどうシャープに示していくかということになると思いますが、一言で言うとやはり社会参画なんだと思いますし、特別活動でしかできないことは何かといたら、個人でできないことですよね。望ましい集団活動を通さない限り絶対できないこと、これは何かと突き詰めたらいいのです。つまり、ここに書いてある人間関係を形成する力も、社会を形成する力も、自己を生かす力も、一人ではありません。集団の一員としてどう人間関係を形成できるか。つまり対人能力というよりも、チームワークであり、リーダーシップであり、フォロワーシップであり、チームビルディングであり、そういうことを特徴付けないと、人間関係というのはどこでもやっているわけです。こういうことを明確にすべきですね。社会を形成する力も同様です。集団の一員としてあなたは何かができるか。だからこれは主権者教育になるし、法教育になるし、弁護士がなぜ社会科以外の特別活動に目を向けているかといったら、正にそこにあるわけです。市民自治をやっているわけです。それから自己を生かす能力も、勝手に自分が生きるわけじゃないわけで、社会の中でどう生きるかということで、このことを明確に打ち出すということが大事なのではないかと思います。そう考えると、少し細かいところですが、丸で書いてある「人間関係を築く」で終わっている文章の下が、やはり「いい生活を作る」とか「社会を作る」という言葉で終わらなくてはいけないのではないかと。

中高がわい小化されて小さくなっていないか。いい社会がつくれなければ、そもそも生きていくことができないわけですから、そのことを明確に示すべきでないかと思っています。

それからもう一つは、それこそ黒木委員がおっしゃったように、特別活動とは何かということです。私も市教委にいた頃、議員に特活と婚活の違いが分からないと言われたんですよ。分かるようにするというのは大変重要で、また、教育課程における、これまでは教科とか教科外と言ってきましたけれども、こういう役割のようなものを明確に示すべきです。例えばヒントは書いてあるわけです。つまり汎用的な能力にするためにはどこかで使ってみなくてはいけない。それが教科横断的な課題をやっている総合的な学習の時間なんだ。それから自分の最も身近な社会である学級や学校を作っていく、そういうところで活用する場なんだということが書いてあったと思います。それを構造化して、きちんと示さないと、最終的に習うのは汎用的能力ですから、受験学力だけではありませんので、特別活動というのは、こんな役割をしているんだということを明確に示すべきです。これが社会からも認められ、世界から認められるということが大事なのではないかなと思います。

ただ、実は、世界は日本の特別活動を見て、必ずしも全てを賛成とは言いません。運動会を見て北朝鮮みたいだと言います。つまり、残念ながら日本の集団活動は、ややガラパゴス化している部分があるのではないかと。みんな一律でいいのか。つまり合意するということは同調でいいのか。物を言わないということでもいいのか。改めて集団の在り方について考えていく必要があるのではないのでしょうか。どうぞよろしくお願いします。

#### 【吉村委員】

合意形成の大切さ、またそういうことをやっていく資質・能力が大事だということが書かれています。やはり今、杉田委員もおっしゃったように、合意も、単に多数決で決めたら、もうそれで合意なのかというやはりそうではな

くて、本当は、先ほど議論には論理性と倫理性があるというような話もしましたけれども、その合意の質のようなものです。単に結論を出せばいいということではなくて、何か質的なものもきちんと見ないといけないということがはっきり分かるようになっていて、更にいいかなと思っています。

#### 【生重委員】

今、正しく意を得たりというお話で、合意は同調なのかというのを伺って、今回の全体の中でも、正解主義からの脱却ということがキーワードになっていて、教師が正しい答えを教えて、「はい」と答えて、その教えたつもりと分かったつもりをどうするのかということもあります。アクティブ・ラーニングをどう活用するかということの中に、この特別活動こそが正解がない、みんなで話し合い、お互いに人の話を、意見を聞き、自分も発言するという、その場の形成を学ぶ。先生たちも教えたがるのではなく、場を聞き出していく力みたいなところが、一番ここで実感できるのではないかなと思っています。だから是非学校の先生や一般市民が読んでも分かる書き方で、これから社会に出て付けなければいけない力が書き込まれる必要があります。手法としてはこうだろう、テーマは、それぞれの地域や学校で、違わなくてはいけないし、そこでの課題解決、それから自分たちのアクションにつなげていく前段階として、特別活動の時間を特に有効活用していただくことで、児童生徒が身に付けなければいけない能力が、そこで引き出されるのではないかなと思います。

#### 【脇田委員】

小学校では学級会という協議の場で、自分たちの学級の問題を話し合い、そして自分たちで解決して、友達と協力して実践する。学級指導的な学級活動の内容にというのが、共通事項にもたくさんありますと平川委員がおっしゃいました。その中の題材に沿って自己指導能力を育成していき、高校で自己決定まで導く学習過程と解説で書き分けてはいます。ただ、小学校と中学校、中学校と高等学校と、必ずしもそこは筋が通っていないのではないかなと思うのです。

本当にどういう力を子供たちに育てていくのか。高校生の子供たちが、本当に次の時代を担っていく社会人として育てていくために、小学校のこういう活動が中学校につながって、そして高等学校へというような系統的なものもあっていいと思います。せつかくここには小・中・高のいろいろな方がいらっしゃいますので、このようにしていければと思います。

#### 【貝ノ瀬主査】

そういった、まさに幼・小・中・高・大学までの発達の段階を考慮したつながりというか指導の在り方、そして資質・能力が明確ではなかった中で育ってきた子供たちということで杉田委員が先ほど、目の前の子供たちということなのでしょうけれども、小中高で指導した経験のある方は実感をお持ちだと思いますが、案外難しいのです。例えばホームルームにしても、学級会にしても、先生が言いたいことをぐっと抑えながら、自分たちで問題解決させるというのは、これは結構難しいのです。アクティブ・ラーニングもそうですけれども、意外と難しい。しかし、難しいで済ませられない問題でもあります。資質・能力も、目指すべきものも明らかにすると同時に、やはりそういう指導方法も同時に追究していかないと、これはうまくいかないだろうなと思います。

学習指導要領自体は教師向けです。でも、社会に開かれた教育課程ということを出すのであれば、そろそろ、教師向け学習指導要領はもちろんあってもいいでしょうが、社会や地域向けの学習指導要領のようなものがあるのもいいのかもしれません。各校長が学校経営方針で、来年度の教育課程はこうなんだということを出しますけれども、全体として、日本の国としてこういう子供を育成していきますとか、そのようなことで社会に開かれた学習指導要領みたいなものも、あっていいのではないかなと個人的には思います。

#### 【黒木委員】

少し先ほど言い忘れたことがございまして、最近気になるのが、地域の子供会の件で、都会であるせいか、自治会との関係もあるかと思いますが、子供会

が余り活性化されていない。そしてなかなか子供会の集まりに行きましても、人数が少子化のせいかわ少し減ってきているということもございます。私は学校子供会というものを以前作ったんですが、地域が担っていた子供会の役割を、やはり学校の中でも何らかの形で具現化していくことが今後非常に大切ではないか。それをまた地域に持ち帰っていけば、往還的に地域と学校とがつながる仕組みが出来上がってくるのではないか。子供会というのが、今後、特別活動を考える上でも、一つのキーワードになるのではないかなと最近考えております。

#### 【杉田委員】

たまたま同じ話をしようと思いましたが、児童会と子供会というものを併設している学校は、結構あります。地域運動会は子供会が運営をします。しかしそれも、話し合う場所ありませんし、学校でやっているわけです。そういった地域一体型の地域づくりに子供が貢献していくということもあるのではないかと思います。

それから、先ほど御提示のあったこの資料のところですけども、少し言い忘れた部分を補足させていただきたいと思います。一つは先ほど申し上げたとおり、人間関係にしても、社会を形成するにしても、自己を生かすにしても、集団との関わりで考えていくべきではないかと申し上げたのですが、これを個人と個人とか個人と集団と個人と分けてしまうと、逆の問題がないだろうか、極めて個人主義的に見ることはないのかと思いました。つまり集団における人間関係というのは一体何なのかということをお問いただければ、けんかをしたらどうやって謝るかみたいな指導を永遠と特別活動でやることにならないのかというようなことが危惧されます。是非こういう表に出ていくものは、皆さんで知恵を出して、できるだけいいものが、いい形で発信できれば有り難いかなと思いましたので、御検討いただければと思ってお話しさせていただきました。

#### 【生重委員】

今、お二人の委員から子供会と地域自治会の子供会の話が出たんですが、それが全体的に衰退しているから、地域学校協働本部という体制になり、学校運営協議会との両輪という新しい形が打ち出されてきていて、自治会とかの高齢化によって事業自体を推進できない。全国の子供会の本部ですらも、規模が縮小されているところですので、これから文部科学省として、きのうの答申を通して打ち出していくのは、地域学校協働本部なんです。そこで今、おっしゃっていたことは、かなりきちんと具現化されていくし、そういう協働本部を持たなければいけないということです。もっと学校のことを中心とするよりも学校と地域を取り込んで、一緒に学校から共に発信していくという打ち出しが今は進んでいるのかなという気がします。

この全体の説明の中でも、子供会を中心に語ると両方のピントがずれてくるので、その部分を入れていけば、子供たちの地域における活動はとても大事なので、これから地域学校協働本部において、そういうところも関係各省も取り込んで進んでいきますので、そのような表現がいいなと思いました。

#### 【藤田委員】

お話を聞かせていただいて、やはり地域や学校との連携・協働ということの重要性、あるいは育てたい力ということを打ち立てていく、それを共有していくことの重要性ということは、改めて私個人も感じました。実はきょうの午前中、総則・評価部会に出ておりまして、育成する力をどう設定し、どう評価していくかという話になったんですが、やはり付けたい力と評価の規準というのは表裏一体なので、それを考えたときに、分かりやすさということを追求すると同時に評価も前提とする議論というのを同時並行していかななくてははいけないような気がするのです。というのは、幾つか特別活動で小学校、中学校にお邪魔するときに、スローガンが身に付けさせたい力にすり替わっている学校がたくさんあるんです。きらきら輝く子供を作ろうとかです。そうしたときに、きらきら輝いている状態になったかどうかを評価するのはすごく難しいので、

目標設定の仕方，評価もしていく，PDCA回していく，みんなで作ろうということ  
を分かりやすく，なおかつ評価も拒まない，そのような目標設定の設定の仕  
方を地域に打ち出していくような方策も今後必要かなと思いました。

**【脇田委員】**

地域に発信していくときの発信の内容が，私は子供たちと特別活動をやっ  
ていく中で，ある保護者の方，地域の方がおっしゃったのは，学級会をやっ  
てる子供たちだから，子供会でも自分たちで話し合いをするんだよねって言  
われるんですね。学校もとにかく子供たちに自分たちの生活，発達の段階  
からいけば低学年から中学年，高学年，中学校，高校と，その段階の中  
でそれぞれの自分たちの生活をどうよりよいものにしていくのかという  
取組もしていきながら，そういう子供たちがまた地域に出ていくという  
関係を，それぞれ別ではなくて，特別活動をやっていくよさも，そこ  
にあるのかなと思います。

**【須藤主査代理】**

社会に開かれた教育課程ということで，皆さんからいろいろすばらしい御  
意見，御発表を頂いたわけですが，共通するキーワードは，私は見える  
化ではなかろうかと思いました。四つの視点がございます。

まず一つ目ですが，地域社会との機能との往還といいますか，それを  
活用した特別活動，学校経営と，幾つかの地域社会の教育機能も具  
体的に委員の方々から出たように思います。

二つ目は，教育学的な理論の確立，つまり教育課程における意義・役  
割が見えるということではないでしょうか。そのためには，個人及び集  
団の変容，そういうものが需要だが，委員の方々からは，この集  
団の変容という意味においても，集団のいわゆる維持機能とい  
うことではなくて，これから考えたときには，目標達成機能とい  
いますか，もっと開かれた集団になっていく必要性もあ  
らうと，そんな御意見だったように思います。

三つ目としましては，学校経営におけるカリキュラム・マネジメントという



ことで、小・中学校の系統性も出されました。さらには冒頭、管理職の理念と  
いいますか、学校運営の理念次第だという話もあったわけです。更に加えると  
するならば、いわゆる教員養成大学における授業といえますか、大学生への訓  
練も大いにここには関わってくる。だから杉田委員がおっしゃるようなものが  
なかなか分からないという先生が巢立っていってしまう実態もあるのではなか  
らうかと思います。

四つ目の視点ですが、社会の変化に伴う社会的事象への対応、これも見える  
化する必要がある。今日的な新たに求められている社会的な課題、そういうも  
のにどう特別活動が取り組もうとしているのか、取り組んでいるのかというこ  
とで必然性や必要性が見えてくるということにもなるのではないか。その中で、  
キャリア教育との関わりも出されました。平成20年の学習指導要領改訂のとき  
には、小・中学校においてはキャリア教育という言葉は使われていません。そ  
の中で、キャリア教育というのは、指導する場、時間といったものが担保され  
ていない。そういう中で特別活動の中で統合していくという必要性も、もはや  
今日的な課題の一つとしてあるのではなからうか。

キーワードとしましては見える化ということが、いわゆる社会に開かれた教  
育課程につながるのかなと思いました。

#### 【貝ノ瀬主査】

須藤主査代理からきょうの議論をまとめていただき、それに尽きるわけでは  
けれども、少しと感想を述べさせていただきます。見える化ということでは  
、やはり社会に開かれたとか、地域に開かれたということは、結局は学校が  
目指す子供像、教育は、地域や社会が目指す教育や子供像と共有されなくては  
ならないということだろうと思います。ですからこれからは、社会総掛かりと  
いうことで、情報共有も含めて教育の目標や子供像も共有されていくべきだろ  
う。だからこそ見える化と、社会も、地域も、先生もみんなよく分かって共有  
していけるということが必要なだろうと思いました。

もう一つは、アクティブ・ラーニングはやはり基礎・基本が前提にないとうまくいかないと思いますね。反転授業も多分、基礎・基本ができていないと空回りするだろうと思います。そういう意味で、やはり目指す子供像も、現場にいた方は実感していらっしゃると思いますが、全員が個が確立しているわけではないというか。大学生でもそうなんですから、小学校、中学校、幼稚園ならなおさらですよ。要するに、世界にこれは誇れないことですが、自己肯定感とか自信が持てない子供が圧倒的に多いという中で、やはりそういう子供たちを抱えながら目指す子供像という、資質をいかに担保していくかということになりますから、これは並大抵なことではないということで、そういう前提を踏まえた上で、本質的に特別活動で目指す子供たちの資質・能力というものをきちんとしていくということが大事なのではないかと。そうしないとただ絵に描いた餅みたいになって、また同じことが繰り返されるようになるのではないかと思います。

予定されておりました議題はここまでです。本日は、これにて終了いたします。